



思い出 そしてこれからへの期待

廣末 英晴

平成8年(1996年)12月1日に当工技センター所長として着任し、早くも2年4ヶ月が過ぎました。着任時の私の挨拶の中に、“新しい人との出会い、そこから生まれる緊張感、そして研究者の育成への期待”などの言葉がある。前者に対しては緊張感を保つにはそろそろ限界を感じるし、後者に対しては時間不足の感が否めない。

この2年4ヶ月の間には、日本経済の不況の深刻化、経済構造改革の取り組み強化、中央省庁再編(国研の独立行政法人化)の動き、地球温暖化防止京都会議(COP3)の開催、ダイオキシン汚染の広がりなど、次から次に大きな問題が発生し、まさに激動の真っ只中であつたように思う。一方、県においては、総合基本計画の第二期実施計画が終わり、新たに第三期がスタートする時期でもあり、またセンターも10周年を迎える時期でもあつた。

このような時期にあつて、センターの職員とともに数々の事業に取り組んできたが、私にとって思いで深いのは、平成9年度に全職員で取り組んだ10周年記念事業(記念誌発刊、技術立県会議・同シンポジウム開催、式典及び研究発表会開催)であり、また平成10年度に立ち上がったいくつかのプロジェクトであり、両年度を通じての研究成果の公表であつた。前者については、記念事業を核として、センターの仕事を県民へ広く正しく知ってもらうために広報活動に力を入れ、特に出願特許の発表で地元紙の一面トップを飾ったり、テレビでもセンターの事業・成果をたびたび取り上げていただき、主旨は果たせたように思うとともにマスメディアに感謝している。

また後者においても、研究者の持っているポテンシャルを研究部長がうまく引き出し、プロジェクトを構築し提案してくれた。結果的には、成功、不成功いろいろあつたが、兎も角、国補あるいは県単のいくつかのプロジェクトが立ち上がったことはご同慶の至りである。これからは、素晴らしい成果を出し、県内企業を中心に研究成果が実用化されることを強く望みたい。サクセスストーリーを作ることが研究開発の重要性・必要性を関係機関に認識してもらえ、また国及び県が目指している研究開発型企業の育成を支援することに通じる事になると思う。また研究開発と並んで重要な技術支援においても、技術指導事例集を発刊し、好評を得ているようである。このように他の技術支援に関してもできるだけ、仕事の成果をまとめ公表して、県民に評価してもらう方向で進めて欲しいところである。

今年度から研究テーマの立ち上げについて内部及び研究開発推進会議の委員からなる評価をスタートさせたが、これからは是非研究結果の評価制度を設けていく事が必要であろう。基本的には自分たちで研究テーマの立ち上げ・結果の評価を厳しく行っていく姿勢が重要であると考えます。また既に他県で始められたセンター全体の業務の評価、あるいは外部評価の導入、さらにはこれらの情報公開など時代の動きを敏感に感じ取り、県民、^{なかんづく}就中、県内中小企業を中心とする企業に頼られるセンターを目指していただきたい。

最後に、お世話になった工技センターさらには鹿児島県産業界の益々のご発展を祈念して退任のご挨拶といたします。